

植生改善について 考えてみませんか。

サイレージ品質向上のためには、よい原料草の確保、草地植生の改善も必要な要件です。A町では図一のように、更新後六年以上の草地は、チモシーなど基幹草種の構成割合が四〇%を下回り植生改善が必要な場合の多いことが分かりました。

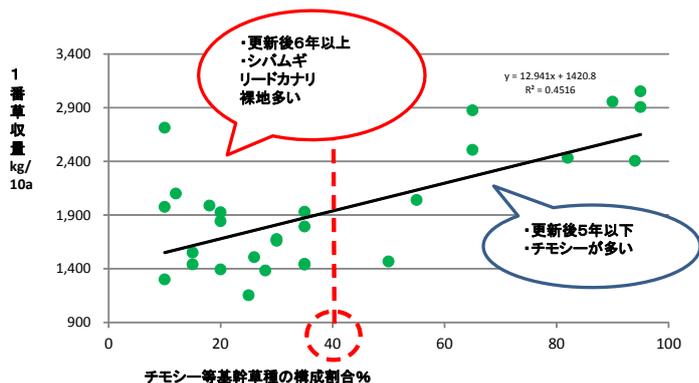


図1 草地植生における基幹草種の被度と一番草収量(A町H27)

表1 H氏の飼料作物の作付状況

経営耕地面積	うち牧草面積	うちコーン面積
合計77.5ha	47.0ha (61%)	30.5ha (39%)

○牧草5年→コーン3年→牧草5年という輪作体系を活用して、牧草を更新(1年に10ha程度ずつ)

・植生改善事例 牧草とコーンの輪作による更新

傷みの少ない草地では、簡易な更新の手法として、作溝法をベースに追播する手法が紹介されています。また、一〇年以上にもなる牧草の経年草地では栽培を見直し、一部では秋小麦を加えるなど畑輪作への試みが始まっています。こうした輪作に早くから取り組んできたN管内H氏の事例を紹介します。

H氏のエサづくりのポイント

- 牧草はアルファルファ混播
- サイレージをグラス対コーンで55%対45%で給与
- 牧草収穫時の刈高さの確保
- 収穫直後の予乾の励行
- 牧草更新年、コーン作付時以外ではスラリー、堆肥を草地表面に散布しない

H氏は、「牛が喜んで食べてくれるエサづくり」を信条に、輪作に取り組み、平成二六年植生



写真1 芳香を放つ良質なサイレージ



写真2 "すり鉢状"の食べ方は牛が美味しく食べるとの証拠

(平成二七年十一月作成)

調査ではチモシー、アルファルファなど基幹草種の構成割合は九〇%を占めています。輪作を始めた理由については「牧草は五年もするとルートマツトが二〇〜二五cmの厚さになるが、この後に三年間とうもろこしを作付し、この間に四回は耕起すると、土壌がすっかり膨軟になっていくことが、やってみて分かった」と言っていました。①「牛をよく見て、牛と対話する」、②畑をよく観察する、③よいと思ったら、まずやって見る柔軟な姿勢、が現在の経営安定につながっているのだと思います。